

モレキュール型研究計画

「強誘電性相転移の理論的研究」報告

この計画は京都の強誘電体理論グループと北大応電，名大工，東工大，東京教育大理の研究者とで，昭和49年度後半期基礎プロジェクトの一環として作られたモレキュールである。第1回の研究会は昭和49年10月18日，19日の両日，北大応電研の徳永正晴氏を基研に招いて開かれた。そこで問題を整理し，第2回目準備をした。第2回目の研究会は11月21日，22日の両日琵琶湖畔堅田町の求是荘で開かれたが，この報告はその時なされた発表を主にしたものである。

発表された研究を順序不同にあげると

石橋善弘（名大工，人工結晶研）：アンモニウム・ロッシェル塩の理論

納 繁男（関西学院大，理）：配向相転移とゆらぎの理論

吉光浩二（関西学院大，理）：チオ尿素の理論

徳永正晴（北大，応電研）：強誘電体の臨界現象の理論における2,3の問題

高田 慧（東京教育大，理）

大成逸夫（神奈川大，工）：セントラル・ピークとトンネル・モード

八田一郎（東工大，理）：強誘電・構造相転移における比熱

松原武生（京大，理）：強誘電性相転移の微視的理論の試み

活発な討論があつて，ここに報告する研究結果以外にもいくつか問題が浮び上つた。整理していつかまた新しいモレキュールを計画したいと考えている。

モレキュール世話人 松原武生